

中嶋扉をあけると一人の男（ゲスト）が入ってくる

男 「あの〜中嶋さんのお宅ですか？」

中嶋 「はい」

男 「中嶋満さんは？」

中嶋 「自分ですけど、どちら様ですか？」

男自分の名刺を出しながら

男 「申し遅れました私ごういづものです」

中嶋 「あの？レコード会社の方が私に何か？」

男 「単刀直入にいます。うちの社からデビュー、再デビューしませんか？」

中嶋 「……えっ？」

男 「実は私、若い頃中嶋さんのファンでした。最近みてないなってずっと気になってたんです。中嶋さんの作るメロディーが好きでした。なんと言いますか、アレンジとか歌詞とかがもっとよければ間違いなく大ヒットするのにと昔から思ってたんですよ。」

中嶋 「は……」

男 「それでね、もう一度うちからなんか違った形でデビューしてくれないかなと思いついてね……ちょうど、明後日うちの公開オーディションが有るんですがそれに出てもらいたいんです。合格してくればうちからのデビューは約束します。」

以下ゲストに、いかに中嶋にデビューしてもらいたいかを
アドリブでしゃべってもらおう

もちろんここがダメだからというところも交えてもらおう

中嶋、マーはそれに賛同したり、反論したりする。

しばらくしゃべったところで

中嶋 「そうですね、あなたがそこまで言っんならやってみましようか？」

男 「ぜひ、お願いします。ただデビューに関しては3つだけ条件があります。

1、書き下ろしであること。

2、アレンジはロック調で前向きなイメージが有るもの。

3、間奏でラップを入れる事。

これでどうですか？」

中嶋「ラップ？」

男「はい、ラップです。どうですか？この条件で……」

中嶋、頭を抱える

中嶋「ラップか……」

マー「はい、是非やらせてくださいーやらせます。」

中嶋「ちょ……」

マー「ミツちゃんも黙ってて！あの、大丈夫です。私が責任持ってやらせますから！」

男「では、来週会場でお待ちします。」

男部屋を出て行

中嶋「ちょっとマー君！何勝手に決めちゃってんだよ！どうすんだよ？」

マー「やるっきゃ無いでしょ！まさにロックーだよ！起死回生のチャンスだよ！」

中嶋「そりゃやりたいけどさ、あの条件厳しすぎないか？ラップだぞーラップなんて……」

マー「何言ってるんだよ！今やらないでいつやるんだよ！」

中嶋「今でしょ！あっ……」

マー「そうだよ、今だよーほら、そうと決まれば早速取りかかるう！」

マー、ギターを中嶋に渡す

マー「ほらー早くー」

中嶋「ちょちょちょっと待ってよー早くって言われたってそんなにポンポンメロディーなんて

出でこないよーちょっと考えさせてよー」

マー「は……何言ってるの？メロディーはもう有るじゃん！」

中嶋「……」

マー「おっきの曲ー」

中嶋「え？いや、あれは新曲じゃないし」

マー「何固い事言ってるんだよ！あの歌は誰が知ってるの？売れた歌なの？」

中嶋「いや、だれも……知らないと思う……」

マー「でしょ、誰も知らなきゃそれは新曲なんだよーだからさ、アレンジと歌詞だけ変えれば

良いんだよー」

中嶋「そうか、よし、なんかいけそうな気がして来たーえっと、ロックーって言ったけ？こんな感じかな？」

中嶋ギターを弾きながらロックーのテーマを口ずさむ

中嶋「ちやらーちや〜 ちやらちや〜 ちやらーちや〜 ちやらーちや〜」

マー「ちがうちがう、それじゃなくてー！」

中嶋「えっ？ロックーって言ったらこれでしょー！エイドリア〜ん」

マー「確かに、それもロックーだけど！それ歌無いじゃん！ロックー3の方！ジャ、ジャッツ
ヤッツヤツ ジャッツヤッツヤツ ジャッツヤッツヤツ〜ンの方！」

中嶋「あゝ、サバイバルの方ね？」

マー「サバイバルじゃないよ！サバイバー！」

中嶋「ん？これでしょー！」

中嶋サバイバーのイントロを弾き始める

マー「それぞれーそれでさっきのメロディーつけてみてー！」

中嶋歌をのせる

中嶋「流れた 月日を今日も 指折り数えて思っ〜・・・なんか感じいいね！」

マー「よくないよーやっぱり歌詞がダメだ！考えよう、歌詞考えよー！」

中嶋「えっ感じが全く変わったからこのままでもいいんじゃない？」

マー「もー、さっき言ったでしょー！暗いって！あのね、ミッちゃん娘さんに戻って来てほしいんでしょ？だったらお娘さんの心に響くような歌詞にしないと！今の若者が感銘するよ
うな内容にしないと、ほら、考えようー！」

中嶋「う〜ん・・・しかし娘の心に響くとなると童謡チックなのがよいのかな？」

マー「は〜っ？何言ってるの？何で童謡なの？もう良い、俺が考える」

中嶋「考えるってそんなに簡単に」

マー遮るように突然大声で

マー「somebody says」

中嶋「ん〜」

Nobody knows しかみ取るんだ 新しい自分を
By the way 立ち止まるはずに どうしてもすすむと

輝き放つ 未来はすぐそこぞ
昨日までの苦しみや 悲しみ忘れ お前迎えにいっくぜ

戻ってこいよ どこか知らない世界(くに)で涙流すなら
戻ってこいよ 長く険しい道が 待ち構えても 俺が守ってやるから

Lap

希望に満ちた 明日を探すため
一人生きるせつなさや 寂しさすてて 黙ってついてこい

戻ってこいよ 誰か知らないやつに 何を言われても
戻ってこいよ 強く激しい風が 吹き付けてても 俺が守ってやるから

マー「できた〜」

中嶋「えっ、まだだよ、ここからが大変なんだよ！」

マー「ん？何が？」

中嶋「だってまだラップのところが一つも書いてないじゃない、それが大変なんだから！」

マー「あゝラップの部分ね、大丈夫だよ！」

中嶋「大丈夫じゃないよ、ラップって言うのはさ歌詞に韻踏んだりとかいろいろ大変なんだか

らー」

マー「あのお．．．．」

中嶋「なに？」

マー「そのラップの部分なんだけどさ」

中嶋「なに？」

マー「その．．．．」

中嶋「なんだよー！」

マー「俺にやらせてもらえないかな？」

中嶋「は〜？」

マー「いや、その何て言うかさ、ミッチちゃんが歌の部分担当で、俺がラップ？みたいなコンビで行ったらなんか良いんじゃないかな〜何て思ってるね……」

中嶋「????????」

マー「いやほら、海外なんかでもさ、歌の人とラップの人って別だったりするじゃん！たとえ

ばさ、エミネムが歌のところをリアーナに頼んだりとかさ……」

中嶋「ちよっとまで、なんだそのエミネムって？リアーナって言うのは何者だ！」

マー「えっ？ひよっとして知らない？う〜ん、アメリカのラッパーとヒップホップシンガー！」

中嶋「う〜ん……」

マー「う〜ん、日本人だったら、そうだなファンモンとかヒルクライムとか？」

中嶋「……ポケモンなら知ってるけどな」

マー「ポケモンで！それアニメだから……とにかく、二人組って言うのが渋いんだって！」

中嶋「う〜ん……大丈夫かな？」

マー「ミッチちゃん……俺を信じて！」

中嶋「信じてってマー君の何を信じるんだよ！だいたいあなた経験無いでしょ？全くの素人でしょ？素人がはいやりますって言って通用するほどこの世界は甘くないんだからね」

マー「大丈夫だって！」

中嶋「何を根拠に大丈夫っていつてるんだよ！」

マー突然ラップを始める

マー「俺が誰かなんて お前が何で 気にするかなって 考えただって

細かい気遣い、不愉快なちよっかい 特別扱いは マジで厄介」

中嶋「何だよお前、その全然力強くないラップは……！！まく解ったよどっちにしろ俺はフツプなんてできないからさ、マー君に頼むよ」

マー「ホント？いいの〜」

中嶋「いいもなにも、やりたいんでしょ？俺だつてできないし今からできる人だつて探せないししょうがないじゃん。でもいい？こればさ、俺の人生がかかっているんだからね？ここでうまく行けばまた娘とかみさんを取り戻せるんだからね、そこところよろしく頼むよ」

マー「ミッチちゃん〜」

中嶋「なに〜？」

マー「俺を信じてー！」

中嶋「解ったよもう、「じゃーラップの部分はマークんに頼んだからね。」

マー「了解しましたー！じゃーさ、俺これから帰ってちょっとイメージするから、まかせといて」

中嶋「明日だからなー頼むぜー！」

マー「うしかはの手につかむぜ Big Dream~」

マー鼻歌まじりで部屋を出て行く

中嶋部屋に一人になり、飾ってある写真などを見てひとりごつ

中嶋「康世、こずえ、俺絶対このチャンスつかむからな、そしてお前たちとまた一つ屋根の下で暮らせるように頑張るから」

中嶋の携帯が鳴る

中嶋着信をみるが誰だか解らない？

中嶋「ん？こんな時間に誰だ？」

中嶋、不思議に思いながらも電話にでる

中嶋「もしもし？……………」

ん？こずえか？……………」

うんパパだよ！……………」

久しぶりだな？元気でやってるか？……………いくつになった？……………」

そうかもう18歳かだな……………」

どうしたこんな時間に？……………」

えっ？……………お前なんで知ってるんだ？……………」

そうか、友達が……………」

えっ？観に来る？……………わかった

ママはどうしてる？……………うん、わかった

うん、がんばるよーじゃーな……………」

中嶋、電話を切る

中嶋「そうか、観に来るのか、こつしちやいられないな」

中嶋、ギターを持って練習し始める

中嶋「Somebody say 立ち上がるんだ 胸にその思い抱きつ

Everyday 燃え尽きるまで その身を粉にこすり

Nobody knows つかみ取るんだ 新しい自分を

By the way 立ち止まるなよ! ぶい! ぶい! ぶい! ぶい!

マー君が入ってくる

マー「うるさくって言うのーもう、早く寝なよー今更練習したって変わらないんだから。」

中嶋「だって、」

マー「だっても糞も無いのー明日なんだよ、昨日も寝てないんだから、体調壊して声とかでなくなったらどうするの? ミッチちゃんプロ何でしょ? プロは体調管理も仕事のうちって言うでしょー」

中嶋「そうなんだけどな」

マー「だったら早く寝ないとー!」

中嶋「いや、そのー」

マー「なに?」

中嶋「娘が観に来る事になった」

マー事情は知ってた様子で

マー「あっそう、よかったね、だったら尚更早く寝ないと」

中嶋「なんだよ、そんなにあっさり、十年だぞ、十年! 十年ぶりに再開するんだ、それも俺のステージを見に来るって言うんだぞ! しかも初めて俺のステージを観るんだよ! そんなときにグーグー寝てられるかよー!」

マー「……」

中嶋「昔から言ってたんだよ! 大きくなったらパパのコンサートを必ず見に行くからねって!」

マー「あのさ、ミッチちゃん、だったら尚更寝ないと、せっかく娘さんが観にくるんでしょ、最高のステージをみせないと! カッコいいお父さんを見せないと! 明日のステージで娘さ

んと再開！オーディションにも合格、そして、昔の生活を取り戻せるチャンスじゃない！そのためには体調万全で臨まないと！」

中嶋「そうだな、うんそうだ！なんかありがとつな！いろいろ気を使ってくれて」

マー「いやいや、俺も完璧なラップ作るから期待しててね！あつ、それでさ、グループ名何だ
けむむ、2MNどいさ〜」

中嶋「？」

マー「中嶋満と中島勝、頭文字とってM.Nで二人だから2MN決いよね？」

中嶋「あつうん、良いんじゃない」

マー「じゃーそれで登録しとくからね」

中嶋「あつうん、頼むよ」

マー部屋を出て行く

中嶋「よし、では明日のために寝るとするか」

中嶋部屋の電気を消す